

論壇



中嶋 嶺雄

四月三十日付の本欄で竹内実氏が、いわゆる「覇権」の意味について解説された。竹内氏ならではの貴重な卓見であったが、今日の状況における「覇権」の意味については、もう一つ別の角度から照射すべきだとも思われるので、いさゝか拙見を述べてみたい。

今日の中国の論議のなかに頻出(ひんしゅつ)する「覇権」ないしは「覇権主義」という言葉は「王」に対する「覇」という語のニュアンスからしても、英語でヘゲモニーと置きかえただけではすまされない含意をもっているが、これらの言葉は六〇年代末までの中国の文獻にはほとんど見出せない言葉である。

ソ連のチェコ侵入や珍宝島三日付の人民日報社説「大國のなかで、もし一つの社会主義の覇権主義を打倒しよう」、同年十一月の国連総会での蔣経國の演説「代表の初演説などをへて中国の立場は固まっていた。こうして立場は、七三年以来「深く地下道を掘り、いたるところで食糧を貯え、覇を称となえよ」という毛沢東指示によって裏付典」七一年修訂本や、七三年版

「覇権」の今日的含意

戦略論的な背景もつ新しい言葉

レジネフ・ドクトリンを中国が公式に批判しはじめた七〇年四月二十一日付の人民日報など三紙誌共同社説「レーニン主義か、それとも社会帝国主義か」においては「いわゆる「プレジネフ・ドクトリン」とはまさきれもない覇権主義である」と明白に語られた。やがて七二年一月二十

「新華字典」の五三年初版本や同年の「英華大辞典」、六四年の「漢英時事用詞確しい」などには「覇権」もしくはヘゲモニーの訳語としての「領導権」・「覇権」が出てくるが、興味深いことに、中国がその言葉を一定の明白な政治的主張に基づいて用いはじめた七〇年代以降の最新の辞典類からは消えてしまった。一般名詞としてではなく特別な意味づけが必要とされたためであろうか。しかも多くの中国語辞典や重要な漢辞典類には「覇権」が出ていないか(台北の「中文字大辞典」、林語堂編「当代漢英詞典」)出ているのも出典がない(諸橋「大漢和辞典」)。

こうした点からみて、「覇権」という言葉自体「東洋の覇権を争う」といった、大東亜共栄圏、時代の日本語を、「自力更生」などの言葉同様、中国側が受容したものはなからう

(東京外語大助教授・国際関係論 保論) 投稿